〔研究ノート〕

# 高齢者施設における老年看護学実習での学生の困難感に関する実態調査

中川　孝子　　熊谷　和可子　　木村　ゆかり
杉田　由佳理　　福岡　裕美子

**要旨**

本研究では、高齢者施設で老年看護学実習を行った様々な教育課程の学生の実習中の困難感を明らかにすることを目的に、X県内の看護基礎教育課程に在籍する学生のうち高齢者施設で老年看護学実習を行った者を対象に質問紙調査を実施した。その結果、高齢者との同居を含めた一定期間の高齢者との関わりがあった学生は６割以上いたが、約８割の学生が実習期間中に高齢者との関わりで「言葉が聞き取りにくい」「認知症高齢者とのコミュニケーション」「話しかけても反応がない」等の困難感を感じていた。また、スタッフや実習指導者との関わりについて８割以上の学生は戸惑いや困難さを感じていなかった。さらに、高齢者施設の看護師の役割については96％の学生が理解できおり、多職種との連携や看護師の役割など高齢者施設における老年看護学実習での学びも明らかになった。これらのことから、今後の実習指導の方法や環境調整の必要性が示唆された。

Key words：老年看護学実習、高齢者施設、学生の困難感

## Ⅰ．はじめに

老年看護学実習は病院のみならず、介護老人保健施設（以下､老健）や介護老人福祉施設（以下､特養）､認知症対応型グループホーム（以下、GH）など多様な場で実習を行っている。高齢者施設では、入居者の大多数に認知症があり、対象者への対応に困難感を抱く学生も少なくない。さらに、介護職など多職種との関わりも多く、病院実習との違いに困惑することが考えられる。また、高齢者施設の実習では、実習施設の種別によりケアの目的・方法、職員構成等に違いがあり、学生の困難感にも違いがあることが予測される。

石垣ら[1)]は、老健で生活している高齢者を受け持った短期大学３年生の看護学生が、老年看護学実習においてどのような困難感を抱いたかについて分析した結果、学生の抱く困難感として、【高齢者を理解してよりよい療養生活を支える援助の難しさ】を中心的要素として､【実習初期における高齢者からの情報の引き出しや同意を得ることの困難さ】、【認知症にともなう行動や発言、症状出現時の対応方法への戸惑い】、【拒否や否定をされたり、叩くなどの攻撃を受けることによる驚きと戸惑い】、【高齢者に対し必要な援助を推し進めて実施することの難しさ】、【施設職員の認知症高齢者を尊重した態度と統一した対応ができないことに対する戸惑い】の６つの困難感（シンボルマーク）を抽出した。それぞれの困難感は、学生の実習過程において互いに影響を及ぼし合い、困難感を増幅

させる状況を引き起こしていた。また、福田ら[2)]は、実習初期の４年制大学３年生の看護学生が老年看護学臨地実習で抱く実習の困難等を調査し分析した結果、学生が困難と感じた内容として、【老年者とのコミュニケーション】、【老年者の状況に応じた看護援助】、【看護過程の展開】、【教員・臨地実習指導者との関わり】、【実習記録】、【老年者の特徴理解】、【実習における報告】【その他】の８カテゴリが抽出された。

このように、先行研究では大学や短大等、個々の教育機関の看護学生を対象とした研究が多く、大学、短大、養成所など様々な教育課程の学生の実習での困難感を調査した研究は見当たらなかった。また、石垣ら[1)]の結果では、老年看護学実習は困難感を増幅させる状況を引き起こしており、老年看護学実習の目的・目標の達成にも影響を及ぼしていることが考えられた。

以上から、本研究では、大学、短大、養成所など様々な教育課程における学生を対象に、高齢者施設での老年看護学実習の学生の困難感を明らかにすることを目的とした。様々な教育過程の学生の困難感を明らかにすることは、幅広い多様な実習指導の方法や実習場所の環境面での改善につながり、効果的な教育方法の検討が可能になると考える。

## Ⅱ．用語の定義

本研究で扱う「学生の困難感」とは、石垣ら[1)]の先行研究をふまえ、「高齢者を受け持ち看護過程に取り組む過程で、高齢者や多職種のスタッフ・実習指導者との関わりにおいて、戸惑ったり葛藤し、看護過程の展開がやりにくい、むずかしい、さらに、高齢者施設の看護職の役割の理解や看護職員以外の多職種との連携がむずかしいという学生自身の思い」とする。

## Ⅲ．研究方法

### １．対象者

Ｘ県内の看護基礎教育課程（大学・短大・養成所：以下、学校養成所）に在籍する学生。

高齢者施設で老年看護学実習を行った者で、研究協力が得られた学生を対象とする。

### ２．調査期間

平成28年10月～平成29年３月。

### ３．調査方法

Ｘ県内の学校養成所の管理者に研究の依頼文と質問紙を郵送し、研究協力の同意の得られた学校養成所で調査を行った。高齢者施設において老年看護学実習を終了した学生に対し、実習終了後、質問紙調査を実施した。調査は、学生が所属する学校養成所の一室にて実施した。他の学校養成所の研究メンバーが、研究の依頼文と質問紙を配布、文書による説明を行い質問がないか確認をした。自記式質問紙に記載後、調査場所に設置した回収箱に投函してもらった。回収箱の留め置き期間は１週間とした。

### ４．調査内容

調査内容は、学年、年齢、性別、実習場所と実習日数、祖父母等との同居の有無、老年看護学実習以前の高齢者との一定期間の関わりの有無（高齢者施設でのボランティアやアルバイトなど）について質問した。また、高齢者への対応（コミュニケーションや援助等）、スタッフや実習指導者との関わりについての困難感、高齢者を受け持ちした他の領域実習との違いについてを「すごく感じた」から「全く感じなかった」の４件法にて質問した。また、高齢者施設の看護職の役割の理解について「理解できた」から「理解できなかった」の４件法、看護職員以外の多職種との連携ができたかどうかについて「できた」から「できなかった」の４件法にて質問した。さらに高齢者への対応（コミュニケーションや援助等）やスタッフや実習指導者との関わりについての困難感、高齢者を受け持ちした他の領域実習との違いについて聞いた質問項目には、その理由を問う具体的な選択肢に回答してもらった。この選択肢は筆者ら[3)]の

老年看護学実習の調査結果を参考に作成した。

５．分析方法

分析するにあたり、各質問項目の記述統計量を求めた。統計ソフトはIBM SPSS Statistics 24を使用した。老健と特養での実習と各質問項目との関連については、$\chi^2$検定を行った。高齢者への対応についての困難感、スタッフや実習指導者との関わりについての困難感、他の領域の実習で高齢者を受け持ちした病院実習との違いは、「すごく感じた」「やや感じた」と「あまり感じなかった」「全く感じなかった」の２群とした。高齢者施設の看護師の役割の理解、多職種との連携状況は、「できた」「ややできた」と「あまりできなかった」「全くできなかった」の２群とした。有意水準は５％未満とした。

６．倫理的配慮

本研究への協力は自由意思で、協力を拒否しても何ら不利益を被ることはなく、成績評価にも無関係であることを文書に明記、口頭で説明した。また、研究メンバーの所属する学校養成所で実施する場合には他のメンバーが調査を実施するなど、学生の自由意思を尊重し、強制力が働かないよう注意を払った。無記名のアンケートのため、アンケートの回収をもって同意とみなした。なお、本研究は青森中央学院大学研究倫理委員会の承認のもと実施した（承認番号：ｈ28-01）。

## Ⅳ．結果

１．基本属性（表１）

研究協力の同意の得られた学校養成所は、４年制大学２校、短期大学１校、専門学校２校であった。質問紙は217部配布し、回収は201部、回収率は92.6％だった。対象者の基本属性は、４年制大学３年生94名（46.8％）、短期大学２年生70名（34.8％）、短期大学３年生１名（0.5％）、専門学校２年生21名（10.5％）、専門学校３年生15名（7.4％）で、１年生はいなかった。年齢は、18-22歳が165名（82.1％）で最も多く、次いで23-29歳の21名（10.4％）であった。性別は、女子が175名（87.1％）と多く、男性が22名（10.9％）であった。

**表１　対象者の属性**

| | | 数(%) | n |
|---|---|---|---|
| 教育課程・学年 | 4年制大学　3年 | 94(46.8) | 201 |
| | 短期大学　2年 | 70(34.8) | |
| | 短期大学　3年 | 1(0.5) | |
| | 専門学校　2年 | 21(10.5) | |
| | 専門学校　3年 | 15(7.4) | |
| 年齢 | 18-22歳 | 165(82.5) | 200 |
| | 23-29歳 | 21(10.5) | |
| | 30歳以上 | 14(7.0) | |
| 性別 | 男性 | 22(11.0) | 197 |
| | 女性 | 175(89.0) | |

２．実習施設と実習日数について

実習を行った施設については複数回答で、老健159名、特養36名、その他104名であった。老健での実習割合が一番高かった。その他の内訳は、GH １日、小規模多機能型施設１日、通所リハビリテーション１日、通所介護１日であった。

学内実習日を除く施設での実習日数は５～10日間であった。６日間（43.8％）の割合が一番多く、次いで10日間（20.4％）、８日間（16.4％）であった。

３．祖父母等との同居経験と実習以前の高齢者との関わりと高齢者への対応についての困難感について（表２）

祖父母等と同居した経験の有無については、「同居あり」122名（61.0％）、「同居なし」78名（39.0％）で６割以上の学生が高齢者との同居経験があった。その中で、「同居あり」の学生は、「すごく感じた」「やや感じた」を合わせた77.9％の学生が高齢者への対応についての困難感を抱いていた。また、「同居なし」の学生は、「すごく感じた」「やや感じた」を合わせた67.2％の学生が高齢者への対応についての困難感を抱いていた。

看護学実習前に１～２回というような単発的な関わりではなく、アルバイト等で一定期間高齢者と関わりを持った経験の有無については「経験あり」138名（69.0％）、「経験なし」62名（31.0％）で７割弱の学生が一定期間高齢者と接した経験を持っていた。その中で、「経験あり」の学生は、「すごく感じた」「やや感じた」を合わせた76.1％の学生が高齢者への対応についての困難感を抱いていた。また、「経験なし」の学生は、「すごく感じた」「やや感じた」を合わせた61.6％の学生が高齢者への対応についての困難感を抱いていた。

困難感を抱いている具体的な理由は、複数回答で、「言葉が聞き取りにくい」95名、「認知症高齢者とのコミュニケーション」92名、「話しかけても反応がない」57名、「発語がない人とのコミュニケーション」53名等であった。

**表２ 祖父母との同居経験・高齢者との関わりと高齢者への対応についての困難感の状況**

n=200

| | | | すごく感じた | やや感じた | あまり感じなかった | まったく感じなかった |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 数(%) | 数(%) | 数(%) | 数(%) | 数(%) |
| 祖父母との同居経験 | あり | 122(61.0) | 24(19.7) | 71(58.2) | 23(18.9) | 4( 3.3) |
| | なし | 78(39.0) | 22(28.2) | 43(55.1) | 9(11.5) | 4(18.2) |
| 高齢者との関わり | あり | 138(69.0) | 27(19.6) | 78(56.5) | 26(18.8) | 7( 5.1) |
| | なし | 62(31.0) | 19(30.6) | 36(58.1) | 6( 9.7) | 1( 1.6) |

４．スタッフや実習指導者との関わりについて感じた困難感について（表３）

実習中にスタッフや実習指導者との関わりについて困難感を感じた学生は、「すごく感じた」と「やや感じた」を合わせると38名（18.9％）だった。困難感を感じなかった学生は、「あまり感じなかった」と「全く感じなかった」を合わせると158名（78.6％）であり、８割弱の学生は困難感を感じていなかった。実習中に困難感を感じた具体的な理由は、複数回答で、「介護職

**表３ 実習指導者やスタッフとの関わりについての戸惑いや困難さ**

n=196

| | | 数(%) |
|---|---|---|
| 実習指導者やスタッフとの関わりついての戸惑いや困難さ | すごく感じた | 4( 2.0) |
| | やや感じた | 34(17.3) |
| | あまり感じなかった | 103(52.6) |
| | 全く感じなかった | 55(28.1) |

員との関わりが多く看護職員との関わりが少ない」14名、「スタンダードプリコーションがされていない」11名、「習った技術や手技とは違う」10名、「指導者の説明が少ない」８名等だった。

５．高齢者施設の看護師の役割と看護職以外の職種との連携について（表４）

高齢者施設の看護師の役割については、「理解できた」と「やや理解できた」を合わせると193名（96.1％）でほとんどの学生が理解できていた。看護職以外の多職種との連携ができたかどうかについては、「できた」と「ややできた」を合わせると193名（96.0％）の学生が連携をとることができたと回答していた。

表４　高齢者施設での看護師の役割と他職種との連携の理解

| | | 数(%) | n |
|---|---|---|---|
| 高齢者施設の看護師の役割理解 | 理解できた | 94(46.8) | 196 |
| | やや理解できた | 99(49.3) | |
| | あまり理解できなかった | 3( 1.5) | |
| | 理解できなかった | 0( 0.0) | |
| 他職種との連携 | できた | 84(41.8 ) | 197 |
| | ややできた | 109(54.2) | |
| | あまりできなかった | 4( 2.0) | |
| | できなかった | 0( 0.0) | |

６．他の領域の実習で高齢者を受け持ちした病院実習との違いについて

他の領域の実習で、高齢者を受け持ちした病院実習との違いを感じたかどうかでは、「すごく感じた」と「やや感じた」を合わせると170名（84.5％）の学生が違いを感じていた。違いを感じた具体的な理由は、複数回答で、「治療ではなく生活に視点をおいている」が118名で最も多く、次いで「残存機能の維持やQOLを考えた援助が重要」111名、「認知症高齢者への関わりが重要」84名、「高齢者の特徴の理解が必要」80名であった。

７．老健・特養での実習と各質問項目との関連

老健・特養での実習の有無と高齢者への対応についての困難感、スタッフや実習指導者との関わりについての困難感、高齢者施設の看護師の役割の理解、多職種との連携状況、他の領域の実習で高齢者を受け持ちした病院実習との違いとの関連について、$\chi^2$検定を行った。老健と特養での実習は、どの項目とも有意差はみられなかった。

## Ⅴ．考察

１．高齢者の対応について感じた困難感について

核家族化が進み世帯構成が変化する中で、祖父母等との同居経験や高齢者との一定期間の関わりがあった学生はどちらも6割以上いたが、その中で、祖父母との同居経験では77.9％、高齢者との一定期間の関わりでは76.1％の学生が高齢者への対応に困難感を感じていた。このことから、高齢者との関わりの経験は高齢者施設における老年看護学実習での学生の困難感とあまり関係がないことが考えられる。また、困難感を感じた内容はコミュニケーションに関する

ことであったことから、同居経験や一定期間の関わりがあることが、スムーズなコミュニケーションにつながるものではない可能性も考えられる。さらに、その中でも、「言葉が聞き取りにくい」「認知症高齢者とのコミュニケーション」についての割合が多かった。平成28年度の介護サービス施設・事業所調査[4]では介護保健施設の入所者の認知症者の割合は90％を超えている。本研究における老健や特養等の入所者も同様の状況が推測される。認知症高齢者は、その症状の進行に伴い言語的なコミュニケーションが困難となる。したがって、高齢者の生活歴の理解と認知症による問題点の把握をもとに、認知症高齢者の精神世界を理解し、個人に合わせた対応を図ることが求められる[5]。以上から、認知症高齢者との関わりの実体験が少ない看護学生は、老健や特養等での高齢者との関わり方が大変難しいことが予測される。また、各校において認知症高齢者とのコミュニケーション方法は授業で教授しているが、事前の知識だけでは十分な対応は難しかったことが予測される。

知識としての習得だけでなく、実習前の演習でシミュレーション学習を行うことで、実習でのコミュニケーションに関する困難感は、いくらかは軽減できたのではないかと考える。また、認知症高齢者との関わりは困難感につながるが、その経験を機に関わり方を試行錯誤することで、実践の中での学びもまた得られるのではないかと考える。

### ２．スタッフや実習指導者との関わりについて感じた困難感について

実習中にスタッフや実習指導者との関わりについて困難感を感じた学生は、「すごく感じた」と「やや感じた」を合わせると38名（18.9％）であり、８割以上の学生は困難感を感じていなかった。数としては少ないが、困難感を感じた理由は看護職員との関わりが少ないことや指導者の説明が少ないことが挙げられていた。これらについては、臨地実習指導者やスタッフとの連携を強化することで、改善の方向性を模索していく必要があると考えられた。いずれにしても、臨地実習指導者およびスタッフからは親切丁寧な実習指導をしていただいたことがうかがえる。

### ３．高齢者施設の看護師の役割と看護職以外の多職種との連携について

高齢者施設の看護師の役割については96.1％の学生が理解できており、実習日数の長短に関わらず学生は高齢者施設での看護師の役割について学ぶことができていたと考える。福田ら[2]は臨地実習では教員が環境調整や看護モデルを見せながら学習の意味付けを示していく指導が重要であると述べている。また、小林ら[4]も教員や指導者がモデル行動として見本となる関わりが学習者の行動に影響すると述べている。今後も、臨地実習指導者およびスタッフとともに、高齢者施設での看護モデルとして実習指導をしていくことの重要性を再認識することができた。

多職種との連携については、96.0％の学生が多職種との連携ができたと答えていた。実習では看護職のみならず、介護職やリハビリテーション職などの多職種と関わりながら実習を行っていたと考える。清水ら[5]の老年看護学実習の学びに関する研究のなかでも、学びとして「リハビリテーション」というカテゴリが抽出されている。本研究では、実習中にスタッフや実習指導者との関わりについて困難感を感じた学生の具体的な内容に「介護職員との関わりが多く看護職員との関わりが少ない」という内容がみられたが、看護職員との関わりが少なく介護職員やリハビリテーション職との関わりをせざるを得ない中で自然に交流が進み、多職種との連携ができたという思いにつながったのではないかと考えられる。

４．他の領域の実習で高齢者を受け持ちした病院実習との違いについて

高齢者を受け持った他領域の病院実習との違いを84.5％の学生が感じていた。違いを感じた具体的な理由は、「治療ではなく生活に視点をおいている」「残存機能の維持やQOLを考えた援助が重要」「認知症高齢者への関わりが重要」「高齢者の特徴の理解が必要」等であり、学校養成所が掲げている一般的な老年看護学実習の目的や目標と内容が一致していた。このことから本研究の多くの対象者は的確な老年看護学実習の学びがされていると考えられた。

５．老健・特養での実習と各質問項目との関連

老健・特養での実習と各質問項目との関連について、$\chi^2$検定を行ったが、どの項目も有意差はなかった。老健･特養の実習施設の違いは、今回の調査項目との関連はなかった。このことは、各校の老年看護学実習において高齢者施設の種類は関係なく、限られた実習日数の中で、何をどう学ばせるかということが重要であることが示唆されたのではないかと考える。

## Ⅵ．結論

祖父母等との同居経験や高齢者との一定期間の関わりがあった学生は、どちらも６割以上いたが、その中で、両者とも70％以上の学生が高齢者への対応に困難感を感じていた。このことから、高齢者との関わりの経験は高齢者施設における老年看護学実習での学生の困難感とあまり関係がないことが考えられた。また、高齢者との関わり方に対して「言葉が聞き取りにくい」「認知症高齢者とのコミュニケーション」「話しかけても反応がない」等の困難感を抱いており、今後の実習指導や環境調整への示唆を得ることができた。実習中にスタッフや実習指導者との関わりについては、８割以上の学生は困難感を感じていなかった。このように､多くの学生が、高齢者との関わりに対する困難感を感じているなかで、９割以上の学生が、高齢者施設の看護師の役割と看護職以外の多職種との連携等の理解を深めていた。

また、高齢者施設における老年看護学実習の学生の困難感は老健・特養の実習施設による違いはみられず、何をどのように学ばせるのかを明確にすることが重要であると考えられた。

## Ⅶ．本研究の限界と今後の課題

本研究では、大学、短大、養成所など様々な教育課程の学生の実習での困難感の実態を明らかにすることを目的としていたが、各学校養成所の対象者数が十分でなく、学校養成所毎の比較検討等はできなかった。また、研究対象者の居住地が限定されていることも本研究の限界である。今後さらに、幅広い対象者による検証が必要である。

## 謝辞

本調査の実施においてご理解ご協力いただいた学校養成所の管理者様および学生の皆様に心からお礼申し上げます。

## Ⅷ．文献

１）石垣範子，他：介護老人保健施設での老年看護学実習における学生の困難感について，静岡県立大学短期大学部研究紀要，26,43-55,2012.

２）福田峰子，他：老年看護学臨地実習における学生の困難状況と対処行動－第一報　実習初期における困難状況の実態－，生命健康科学研究所紀要，18,91-105,2011.

３）中川孝子，杉田由佳理，木村ゆかり，他：平成27年度老年看護グループの活動報告，青森県看護教育研究会誌，第44号，1-2,2016.

４）小林紀明，他：複数の保健・福祉施設における老年看護学実習の学習効果，目白大学健康科学研究，第２号，65-72,2009.

５）清水留美，実盛美幸，羽井佐米子：高齢者施設別特徴における老年看護学実習の学びと課題，旭川荘研究年報，43（1），2012.

（青森中央学院大学　看護学部　准教授　なかがわ　たかこ）
（青森中央学院大学　看護学部　助手　　くまがい　わかこ）
（青森県立保健大学　健康科学部　助手　きむら　ゆかり）
（青森中央学院大学　看護学部　助教　　すぎた　ゆかり）
（青森県立保健大学　健康科学部　教授　ふくおか　ゆみこ）